

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

11
2023
November
No. 529



村長夫妻とトルコ・シリア大地震現地調査隊／冬対策の下屋を張った村長宅のコンテナハウス前で（カフラマンマラシュ県ギョクスン郡エルマル村）

こころの扉——「理想の社会」岡野英夫	2
イスラエル-パレスチナの紛争に関する声明を発表	3
声明文「G7広島サミットを振り返って」 高村正大外務大臣政務官に手交	3
トルコ・シリア大地震現地調査隊派遣	4～5
女性部会いのちに関する学習会を開催	6
平和研究所 第6回研究会	7
HAPIC2023 WCRP日本委員会発表	7
仲田順和師ご逝去	8
共催講座「核時代における非戦」第2回開催	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「理想の社会」

WCRP日本委員
会
理
解
脱
会
理
事
長

岡野英夫



平和な世界と安心な生活は、世界中の誰もが望んでいます。また、その望みは如何にしたら叶えられるのかということを絶えず思考し、生活を営んでいます。幸せを望むことは人生を歩む上で自然な情ですから、すべての人々が我が身、我が家族、我が国の安寧と幸福を希求し、努力することは当然なことです。

しかしながら、社会の表面だけを見ますと、真面目に努力する人が苦しみ、不真面目な人が栄えるように見え

る場面もあり、それが故に不公平な世の中だと考え、世を呪い人と敵対するような危険な思想を生み、ついには神仏を疑うようになります。その心がさらに悪化して地域や民族紛争に発展し、或いは限りなく社会悪を生み出すことになりかねません。

今、大きな時代の転換期の中で、国際社会は国家間の紛争や民族間の闘争、気候変動により多発する大災害や危機的状況の社会経済、先進国でさえ急増する凶悪犯罪

など多くの問題を抱えています。人類の平和と希望とが、功利主義者の毒牙に崩れたるは余りにも悲壮です。私たちは、自己心中に清らかなる神性、仏性とともに残酷なる狂気をも孕んでいる存在であることを認識しなければなりません。我が国においても、罪のない人々を無残に殺めてしまった事件が多発しています。家庭や学校で間違った教育を受けた子供たちは、善悪の判断もつかない利己的で独善的な思考に染まり、精神を病み、犯罪に走ってしまう傾向があります。教育は人間形成の上で大きな影響力を持っていますが、現在の学校教育では、倫理道徳や宗教を学ぶことは出来ませんし、立派な人格を形成する要素も十分ではありません。日本の将来を担う若者が偏った国家観や人生観を持つているとしたならば、それは大変憂慮すべき事態であり、戦争を肯定するようなことにもなりかねません。

私たちは、コロナパンデミックによって、世界人類をはじめとするすべてのものが渺（びよう）として一脈なる生命の中に存在し、万有は互いに支え合いながら生かされ養われていることを恐怖と悲しみの中で学びました。世界民族が興亡死活の岐路に立っていた時には、世界全体が想像を超える規模で団結して、パンデミックの脅威と対峙してきました。それは、有史以来初めての素晴らしい出来事であったと思います。その姿こそが、神が人類に求めていることであり、人類が進むべき道であり、理想の社会なのだと思います。

イスラエル・パレスチナの紛争に関する WCPR/Religions for Peace 声明

10月7日、ハマスなどのパレスチナ武装勢力が、ガザ地区からイスラエル領内に越境攻撃を行ったことから激化したイスラエルとパレスチナ武装勢力との紛争に関して、WCPR/Religions for Peaceは、以下の声明を発表した。今後、WCPR/Religions for Peaceは国際的な宗教ネットワークなどを駆使し、事態の平和的解決に向けてあらゆる努力を行う。

イスラエル・ハマスの紛争に対する Religions for Peace 声明 (2023年10月10日)

Religions for Peaceは、今週末イスラエルで起きた悲劇的な出来事に対して、恐怖におののき、深い悲しみを覚えています。私たちの沈痛な思いと祈りを、被害に遭われたすべての方々、特に、愛する人を亡くされた方々や今も捕らわれている方々に捧げます。平和と安全は、イスラエル人、パレスチナ人を問わず、すべての人々に与えられた基本的な人権です。誰も恐怖の中で暮らしたり、安全のために逃げたりする必要はないはずで

す。イスラエル人とパレスチナ人両者にとつての故郷であり、ユダヤ教、キリスト教、イスラームという3つの宗教にとつての聖なる場所―聖地 (Holy Land) において、Religions for Peaceは、平和は可能であると信じています。そのためには、政治的勇

気と誠実な諸宗教協力の両方が不可欠であると確信します。Religions for Peaceは、暴力の完全な停止と、人質となっているすべての民間人の解放に向けた即時行動を強く求め、ガザに食糧を運ぶ人道的回廊の創設を求める国連世界食糧計画と協調します。

さらに、Religions for Peaceは、諸宗教の協力を通じて、人々と地球の平和を築くことに引き続き取り組んで参ります。私たちは、平和と基本的人権のために立ち上がることを人々に訴えます。そして、深い悲しみと確信をもって、他の人々も私たちとともに、この地域と世界のすべての人々の平和と安全のために一緒に祈ることを求めます。

声明文「G7広島サミットを振り返って」

高村正大外務大臣政務官に手交

世界宗教者平和会議 (WCPR) 日本委員会は10月12日、戸松義晴理事長ら代表者5人が東京・千代田区の外務省を訪れ、高村正大外務大臣政務官と会談し、声明文「G7広島サミットを振り返って」(10月号参照)を手渡した。

同委員会は、今年5月にG7広島サミットが行われることを受けて、同月10日に広島で「宗教者による祈りとシンポジウム」を開催し、『G7サミットに向けた宗教者提言―「ヒロシマの心」が導く持続可能な平和をめざして―』と題する提言書を採択し、同月15日には岸田文雄首相に手渡した。



その後、発表された「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」を受けて、同委員会は宗教者の視点からサミットに対する成果や課題をまとめたものが今回の声明文。

会談では冒頭に、戸松理事長から高村外務大臣政務官へ声明文を手渡しした。高村政務官はこれに対し感謝の意を示し、「声明文をしっかりと受け止めたい」と述べた。そして、「第一に法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を守り、第二にグローバルサウスの国々をはじめとした国際的なパートナーへの関係強化に向けて積極的かつ具体的な貢献を打ち出していくことを確認した」と、サミット開催の成果を強調した。そのうえで、「とくに後者の点において、サミット前にいただいた提言書と軌を一にしており、今回の声明文においても評価をいただいたものと思っている」と見解を述べた。

また会談の席上、戸松理事長は『戦争を超え、和解へ』諸宗教平和円卓会議「第2回東京平和円卓会議の開催が来年2月に決定したことを伝え、外務省に対して協力の要請を行った。

トルコ・シリア大地震現地調査隊派遣 (山越教雄・WCRP日本委員会事務次長)

WCRP日本委員会災害対応タスクフォースは、トルコ・シリア大地震の現地調査隊を10月23日から29日まで、トルコ南部ガジアンテプに派遣した。

この派遣は、国内における報道がほとんどない中、現地の状況とWCRP日本委員会が行った支援先の活動状況を視察し、今後の支援に活かすことが目的。派遣メンバーは、山越を隊長に、館野庸子（災害対応タスクフォースメンバー／解脫会職員）、村山浩代（日本委員会スタッフ）の3人。



生活の不安を訴える被災者（中央）

24日午後は、トルコディアアナト財団を訪ねた。この財団は東京ジャーミーを通じて支援を行った団体。ガジアンテプ事務所にてブリーフィングを受けた後、財団の運営する近郊の避難所を見学した。広大な敷地に1500棟のコンテナハウスが並ぶ。発災当初の3千人から減少したが、現在も2千人の被災者が暮らしている。立ち去ろうとしたとき、一人の老婆から声をかけられた。行

政からは自宅被害が軽微のため自宅に帰ることを求められているが、今後の生活が不安だと訴えかけられた。

25日は、NPO法人パルシックがカフラマンマラシュ県ギョクスン郡で支援を行う山間地帯にある二つの村、エルマル村とクズリヨフ村の村長宅を訪ねた。両村ともほとんどの住民がコンテナハウスやテントで暮らす。まもなく2mの雪に埋もれ、気温がマイナス30度になるという冬を迎える。配管が露出したことによる断水や積雪による停電が予測される中、大きな不安を抱えていた。「いま何が必要ですか」との問いかけに、ヒーターや電気ストーブ、カーペットを挙げた。



倒壊したクズリヨフ村長宅

26日は、9月に開催したオンライン学習会で報告いただいたOnder Organization for Cooperation and Development（オンダー協力開発機構）の本部を訪ねた。学習会に登壇いただいたナシーブ・ダダムさんと、ナシーブさんの父である理事長のアブラハムさんが迎えてくれた。オンダー協力開発機構は、シリアの復興を念頭に未来を

託せる人材育成につとめる団体。本部ビル5フロアのうち4フロアを開放し、子どもから大人までのさまざまな学習・活動スペースとして利用している。語学、演



アブラハム理事長に絵画教室を案内いただく

劇、絵画、サイエンス、刺繍、美容研修、宇宙体験など。今後、注力したい事業は、メデイカルサポート（セラピー）センターとシリア国内に設立予定のオンダー大学とのことだった。

午後は、NPO法人パルシックに紹介されたガジアンテプ近郊で活動する民間団体Kids Rainbow（キッズ・レインボー）の活動センターを訪ねた。ここは、ガジアンテプにおいてシリアから逃れてきた人々が最も密集して暮らす地区。一時的な滞在許可（「難民」資格ではないのでトルコ国内を自由に移動することもできず、非合法的な仕事にしかつけない）を得て暮らす人や許可されない人も多く暮らしているという。この地区で暮らす子どもたちのうち、約6割は学校に通っていないという。このセンターには現在、6〜13歳の140人の子どものたちが登録、午前と午後の2部制でさまざまな活動が行われていた。五つの教室を活用



マイヤーダさんと刺しゅう作品

その後、NPO法人難民を助ける会（AAR）が活動するハタイ県に向かった。ハタイ県はシリア国境に接し、被災地の中でも最も周縁部に位置し、支援が

27日は、NPO法人Stand with Syria Japanの紹介により、ガジアンテプ市内に暮らすマイヤーダさん宅を訪問した。マイヤーダさんは、ハタイ県に暮らす夫を亡くした20人ほどの女性とともに、刺しゅう・手芸作品を作成・販売、その収入を分配することで彼女たちの生活を支える活動を行っていた。



代表のムスタファさんに低学年教室を案内いただく

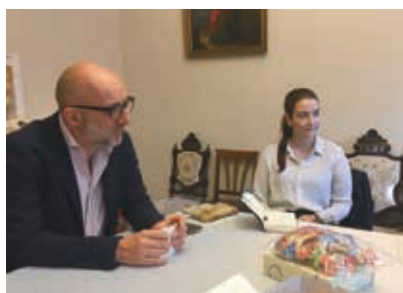
し、心理的サポート、語学（トルコ語）学習や音楽、絵画、映画上映などを行っていているという。今後、力を入れたい活動は、子どもた



ブルーシートのテントがキッチン

人ほどの女性グループ。両グループとも調理やパン作りはビニール製テントで行い、住まいも多くの人がテント暮らしである。また、震災後の物価上昇と原材料の不足が続き、今後の見通しは厳しいと

届きにくいためかテントの比率が高いように感じた。ここではAARの紹介により、三つの団体を訪問した。まず、アンタキヤに市民社会活動ネットワークのSAHAを訪ねた。SAHAは、厳しい状況にある人びとが生活環境を維持するために、この地域で活動している団体のネットワーク化をはかり、協力・団結すること、より有効で持続的な活動となることに努めていた。次に、さらにシリア国境に近いサマナーに二つのグループを訪ねた。まず、現在も一日2千〜3千の朝・夕食を提供しているスープキッチンのグループ。ここでは、食事を提供するだけにとどまらず、人びとの交流の場、コミュニケーションの機能も持っていた。もう一つは、スープキッチンの活動から派生し、パン作りや特産品のミカンやオリーブの生産・販売を行い、得た収入を労働に応じて分配する取り組みを行う15



面会いただいたジュリアさんとオリベ工口さん（左）

WC R P 日本委員会は、災害対応タスクフォースのもと、この現地調査により得られた知見をもとに第二期支援を進める。

ノリティーな存在であるが、シリア、アフガニスタン、ウズベキスタンなど、トルコ国内におけるマイノリティーの人びとの為の支援活動を行ってきたという。地震支援では、アフガニスタン女性のテキスタイル（織物）制作の援助や、心労や不安で大きなストレスを抱えている女性への心理的サポートなどを行ってきたとのこと。今後は越冬支援を始めたいとのことであった。



後ろに見えるビニールハウスが住まい兼パン工房

28日は、イスタンブールに移動して、カトリック教会の国際NGO組織のカリタストルコを訪問した。トルコにおいてはカリタス自身がマイ

女性部会「いのち」に関する学習会を開催

WCRP日本委員会女性部会は、10月9日、オンライン上で「いのちに関する学習会」を開催し、約50人が参加した。

テーマは『日本に避難を余儀なくされた方々の声なき声に寄り添うために』。難民支援の現場から。日本に避難を余儀なくされた方々をとりまく問題や、女性たちの声なき声に寄り添い、一人ひとりが行動につながる自分自身に高めることできるような学びを得ることが目的。

学習会では、平和の祈り、森脇友紀子女性部会部会長（カトリック東京大司教区アレルヤ会会長）の開会あいさつに続き、清泉女子大学文学部地球市民学科教授で同校人文科学研究所所長の「大野俊教授が、『日本における難民受け入れの現状と課題』いま何が問題なのか」をテーマに発題した。

まず大野教授は、世界の難民情勢を報告。2022年に避難民が各地で急増し、今年には世界で1億1千万人になる見込みであると説明し、日本における難民認定の現状について言及した。2021年時点での日本の難民認定率は0・67%で、他の先進国と



大野教授

比べても難民審査制度は不透明で「ブラック・ボックス」な部分があるという。しかし、難民の背景を持つ

著名人たちを例に挙げ、難民は「人財」でもあると強調。難民の受け入れに消極的な日本政府も、包括的な移民・難民政策を確立すべきであると訴えた。

次に、難民として日本にきた人たちの声として、『NPO法人アルペなんみんセンター』で暮らす人たちが、世界難民の日に配信したメッセージ動画を視聴した。



有川事務局長

続けて、NPO法人アルペなんみんセンターの有川憲治事務局長が活動を写真で紹介。同センターは、2

020年4月から、神奈川県鎌倉市のイエズス会の修道院を活動の拠点として、最大30人を支援し、難民への緊急支援、定住サポート、地域活動への参加、難民問題の啓発活動などを行っている。有川事務局長は、ウクライナ避難民受け入れには日本政府をはじめとして多くの支持があり、難民を歓迎できる社会が近づいているとし、「難民を歓迎できる社会は、私たち日本人にとっても、ひとり一人が大切にされ、多様な考え、多様な文化を受け入れられる居心地のよい社会になる」と語った。

最後に、清泉女子大学文学部地球市民学科4年生の高岩璃莉亜さんが発題。高岩さんは、日本に暮らすロヒンギャ難民の子どもたちにオンラインで日本語を教えるボランティア活動について説明。オンラインで

の学習指導で経験した難しさや、試行錯誤の上で子どもたちが問題を解けるようになったことに対する喜びを語った。さらに、ボランティアの人員や、難民問題への知識、日本における難民支援が不足していると感じており、学内や地域で情報発信をしていると紹介した。

質疑応答の後、グループに分かれて「私にはこんなことが出来る」と題した対話セッションを実施。各グループでの話し合いの内容は、全体で共有された。

参加者からは「難民の方と触れ合うことがないので、少しでも努力をして、温かい関係づくりをしていきたい」「知り合いの議員さんにとのよう難民支援をしているか、制度などについて聞いてみる」「住んでいる地域で難民支援をしているところを探して訪ねてみたい」「難民の方が料理店を出しているの、次回訪ねたとき話しをしてみたい」などの声があがり、自分ができる難民支援をプレッジ（誓いを立てること）した。



いのちに関する学習会の参加者

最後に、河田尚子女性部会副部会長（アル・アマーナ代表）が閉会あいさつを述べ、平和の祈りを捧げて終了した。

平和研究所第6回研究会

竹村牧男所長

平和研究所の第6回研究会が10月10日、オンラインで開催され、竹村牧男所長（東洋大学名誉教授）が『東洋的霊性と平和への一視点——鈴木大拙の思想から』をテーマに発表した。

はじめに竹村所長は、仏教哲学学者・鈴木大拙（1870年～1966年）が西洋の思想・文化の特質を「神と人、天と地、主観と客観など、すべて分かれた時点から出発するところに見ていた」と指摘。この「分ける」「二元論」によって「対立・対抗・征服」という傾向が表れ、それがひいては社会に問題を引き起こすと大拙は西洋文化の根底を考えていた」と述べた。

そのうえで竹村所長は、「科学・技術は光と影、正と負の面があり、私たちはいまや影、負の面を克服していかなければならない。それには新たな立場、方法論が必要であり、東洋の伝統的な主客相関的なあり方を組み入れた関係主義的世界観などが導入されるべきだ」と語った。

また「大拙は宗教には母性的な大悲の心がなければならぬ、それが宗教の土台であると考えていた。万物が生まれる根源を『母』によって表現し、『東洋民族の意識・心理・文化の根源には、この母を守るということがある』と言っている。そして『母は無条件の愛でなにかも包容する。善い

とか悪いとかいわぬ。いずれも併呑して（改めず、あやうからず）である』と著述するその言葉は印象的で、これに対し『西洋の愛には力の残りが残る』とも指摘する。大拙はこうして二元分裂以前の世界を自覚し、その世界の裏付けを見失わないことが、本来の人間であるためにきわめて重要であると言う。その世界は、一方が他方に対峙する対立の世界ではなく、そこから現れ出る一切を包含する世界であり、母にも象徴されるような無条件ですべてを受け入れる世界だと言う。そこに平和への道のヒントがあるように思う」と述べた。

そして、「私たちが平和な社会の構築を展望するとき、まずは最も深い人間性とも言える（大拙が示す）霊性の回復という課題をしっかりと自覚するところから始まるのではないか」と語った。

H A P I - C O N F E R E N C E S

W C R P P 日本委員会発表

H A P I C (Happiness Idea Conference) 2023のブレイクアウトセッション「支援事業の現場で宗教ができること」開発・紛争・災害支援で平和をつくる」に11月11日、W C R P P 日本委員会が参画した。

このH A P I CはW C R P P 日本委員会が正会員である日本国際協力NGOセンター(JANIC)が主催するもので、グローバルな社会課題解決に取り組み多様なアク

ターが、枠組みを超えて出会う新しいアイデアやパートナーシップの創出を目指すもの。2020年から開始されて今回で4回目の開催で、会場には200名以上が来場した。

この日は、宗教者、宗教団体、宗教をもとにしている団体(FBO)など宗教が関係するアクターがどのように現在のグローバルな諸課題の解決に貢献できるかを話し合った。

セッションでは、ワールド・ビジョン・ジャパンのミャンマー避難民キャンプのジエンダーに基づく暴力対策やシヤンティ国際ボランティア会による東日本大震災における図書館事業や心のケアに関する取り組みについて報告された。W C R P P 日本委員会は、篠原祥哲事務局長が「ウクライナ情勢に対するW C R P P の取り組み」について発表。現在、欧米を中心とした各国において外交政策に宗教的な要素が重要視され、各国の対外関係省における宗教の専門部門の設置や宗教に関係する外交官の任命などが行われている現状について説明した。そして、昨年9月に開催されたW C R P P 東京平和円卓会議を報告し、宗教者同士が信頼醸成を図ることの意義を報告した。この後、世界銀行東京事務所の大森功一上級対外関係担当官が「支援現場における宗教の役割は無視できない、現在、多くの国際機関においてその意義についての研究が進められている」と語った。

仲田順和師ご逝去

WCRP日本委員会顧問の仲田順和師（総本山醍醐寺座主、醍醐派管長）が、11月10日、ご逝去されました。仲田師は2006年6月から2011年までWCRP日本委員会評議員、2012年11月から現在まで顧問をお務め下さり、長きにわたり宗教間の対話と協力にご献身下さいました。ご生前に賜りましたご厚誼に感謝の誠を捧げるとともに、ご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。

共催講座「核時代における非戦」 第2回開催

WCRP日本委員会は10月14日、日本パグウォッシュ会議と明治学院大学国際平和研究所（PRIME）との共催で、第2回公開講座を「朝鮮半島の核危機をとらえなおす…日本の担うべき役割は何か」をテーマにオンラインで開催した。

WCRP日本委員会ストップ！核依存タスクフォースの中村憲一郎責任者の開会の



講演する梅林宏道氏

あいさつの後、ピースデポ特別顧問の梅林宏道氏が基調講演を行った。梅林氏は朝鮮半島と日本の関係を

地理と歴史から考察し朝鮮半島の南北分断の要因に日本との関係があることを語った。さらに、北朝鮮の核開発の背景と現状について説明し、北朝鮮の核兵器放棄の可能性について非核化交渉の歴史に言及。北朝鮮の核放棄を実現するためには、米国のリーダーシップが必要であるとし、それは圧力路線の外交スタンスでは成功することは難しく、共生のメッセージが再出発の要件であると主張した。このシンポジウムの内容は日本パグウォッシュ会議のホームページで視聴可能。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

縁訪（えんぼう）

トルコ・シリア大地震支援の現地調査のためトルコを訪問。私たちの支援を、最も必要とする人の元へ届けていけるような様々な縁が生まれた訪問であった。

WCRPの活動

《11月》

- 10日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」森の整備（埼玉・所沢）
- 14～15日 青年部会幹事会合宿／第3回幹事会（兵庫・有馬）
- 18日 気候危機タスクフォース「いのちの森プロジェクト」第4回植樹会（埼玉・所沢）
- 21日 タスクフォース責任者会議（京都・キャンパスプラザ京都）
- 28日 平和研究所第7回所員会議・研究会（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）

掲載内容の無断転載を禁ず。